

(トップページ：<http://members3.jcom.home.ne.jp/3632asdm/>)

(クウェイト：<http://members3.jcom.home.ne.jp/3632asdm/Kuwait.html>)

(MENA/イスラム諸国：<http://members3.jcom.home.ne.jp/3632asdm/MenaOicCountries.html>)

(写真は語るシリーズ：<http://members3.jcom.home.ne.jp/3632asdm/PhotoEssay.html>)

マイライブラリー：0323

2014.9.19

前田 高行

写真は語るシリーズ：クウェイト外相、「岩のドーム」で礼拝—イスラエル外交凋落の兆し



クウェイトのシェイク・サバーハ第一副首相兼外相は9月14日、パレスチナ自治政府の首都ラマラーを訪問、政治協力に関する覚書を締結したが、その機会に聖地エルサレムの神殿の丘にあるイスラムの聖地「岩のドーム」を訪問し祈りをささげた。上の写真はその時のものである。

「岩のドーム」は預言者ムハンマドが天使を従え天馬に乗って昇天したといわれる聖なる岩を内部に抱えた礼拝モスクである。イスラムでは預言者の生地でカーバ神殿のあるマッカ、預言者が布教活動を行って最後に亡くなったマディナに加え、預言者が昇天したとされるエルサレムを三大聖地としている。マッカとマディナはサウジアラビアにあるが、エルサレムはイスラエルが支配するヨルダン川西岸にある。

エルサレムはユダヤ教、キリスト教及びイスラムの三大一神教の共通の聖地であり、11世紀以降の十字軍遠征の時代にはキリスト教徒とイスラム教徒(ムスリム)の争いが繰り返され、またイスラエルが建国された20世紀以降はイスラエル(ユダヤ国家)とアラブ(イスラム国家)間の紛争の的となっている場所である。このためエルサレムの旧市街にイスラエル或いはアラブ諸国の首脳

が足を踏み入れることは微妙な軋轢を生むことになる。

現在イスラエルはガザ、ヨルダン川西岸を含む全土を完全な支配下に置き、圧倒的な軍事力を背景にヨルダン川西岸では入植地を広げ、またガザ地区ではハマスをイスラム・テロ組織と断じ一方的な攻撃で多数のパレスチナ民間人を殺している。そしてエルサレムについても自らの利益に反する者の訪問を阻止してきた。

そのようなイスラエルの強硬姿勢から考えると、今回のクウェイト外相の岩のドーム礼拝は極めて異例の事態と言えるのではなかろうか。クウェイト外相はヨルダン政府差し回しのヘリでイスラムの聖地を礼拝している。当然イスラエル政府が了解しているわけであるが、イスラエルがなぜクウェイト外相にこのような寛容な態度を示したのかを考えると極めて興味深い。

クウェイトがイスラエルにとって全く脅威の無い取るに足らない国であるということが理由の一つであろう。サウジアラビアやイラン、トルコの外相であればイスラエルは岩のドーム訪問を認めるはずが無い。ただイスラエルを取り巻く政治環境は大きく変化しており、イスラエル政府もいつまでも従来の強硬姿勢一本槍では済まない状況であることが今回の対応の背景にあると考えられる。

ガザ地区におけるハマスとイスラエルの交戦。イスラエルは空爆の理由の一つにピクニック中のユダヤ人の少年3人、そして偵察中の兵士1名がハマスの支配地区に迷い込み殺されたことをあげ、その報復として「テロリスト」のハマス指導者をミサイル攻撃したと主張している。しかし封鎖された(いわば檻の中の)ガザ地区ではイスラエル側の100倍以上の死者が出ており、その大多数は無辜の市民である。これは誰が見ても大量虐殺そのものである。

さすがのヨーロッパ諸国もイスラエルの過剰防衛に辟易し不快感を隠さない。日本人の大多数も苦々しく感じているはずである。たとえイスラム・テロに対して強い嫌悪感を持っているにしても、である。イスラエルの肩を持つのは多分米国だけであろう。イスラエル政府も国際批判が高まっていることを薄々気づいているに違いない。今回のクウェイト外相に対する特別の配慮はおそらくそのためであろう、と筆者は推測する。

イスラエル外交は行き詰り、凋落の兆しが見えると考えるのは早計であろうか？

以上

本稿に関するコメント、ご意見をお聞かせください。

前田 高行 〒183-0027 東京都府中市本町 2-31-13-601  
Tel/Fax; 042-360-1284, 携帯; 090-9157-3642  
E-mail; maeda1@jcom.home.ne.jp